

公開シンポジウム

「無縁社会と宗教者—新しいネットワークの創出」が開かれました！！



2011年2月9日、大正大学に於いて本研究所主催の公開シンポジウム「無縁社会と宗教者—新しいネットワークの創出」が開催された。「無縁社会」は、各種メディアで度々取り上げられ現代を切り取るキーワードの一つとなっており、その関心の高さは140名という本シンポジウムへの参加者数の多さからもうかがえる。無縁性が進行する社会に対して、様々な「縁」（ネットワーク）づくりが模索されているなか、そうした世俗社会における運動と宗教者がどのような関わりをもっているのか、またもちうるのか、その可能性を探ることが本シンポジウムの目的である。

そこで今回は、世俗社会と宗教界のはざままで種々の活動を実践している下記の方々にご登壇いただき、それぞれの実践やそこから得られたお考えをご発表いただいた。

[パネリスト]

- 國枝欣一（東京新教会牧師／ホライズン・スピリチュアル・ケア研究所）
- 「共に働く宗教者」
- 阪井健二（土生神社宮司／小さな友の会）
- 「助け合う心がふるさと」
- 中下大樹（真宗大谷派僧侶／寺ネット・サンガ）
- 「年間100件の生活困窮者の葬送支援を通じて見えてきたこと」
- 渡辺順一（金光教羽曳野教会長／支縁のまちネットワーク）
- 「釜ヶ崎から始まる『支援のまち』づくり」
- [コメンテーター]
- 白波瀬達也（関西学院大学／大阪市立大学研究員）
- [企画・司会]
- 弓山達也（大正大学教授／国際宗教研究所評議員）

國枝氏は、個々の機能をもった機関が各々の機能を果たすことで、一人の人間の体が健康であるように、



様々な宗教がそれぞれの個性ある活動をしながらか共に働きあうことで、一つの健康（平和）な社会がつけられるのではないかという展望を示したうえで、教会での活動実践を通して、支援者としての自らのスピリチュアル・ペインに気づき、自覚を深めていくことが、孤立の悩みを抱えている人たちとコミュニケーションする重要な条件であるという考えに至ったことを述べた。



阪井氏は、神社を通じた地域活動をしながらか、自らがそこに居場所がないように感じていたこと、逆に、自らの居場所を求めて

地域活動に没頭していった経緯を語りながら、阪神大震災時における救援を始めたとした様々な活動を通して、自分が何かをすることによって社会との関わりを生み出すのではなく、実は、社会（の歴史）によって自分が支えられていることへ気づいたことが大きな体験であったこと、それゆえに個人がもっと自らの地域を知ることが必要であるという見解やそのための活動について述べた。



中下氏は、実は私たちがこうして生まれおちてきたのも「縁」によってであり、本来「無縁」で

はないのだが、家族、地域、会社などが機能不全に陥っている現状を述べ、我々一人一人が自分の生き方を見直し、社会全体の活動へつなげていくことの大切さを訴えた。

渡辺氏は、ご自身の活動を振り返りながら、新たにネットワークを作り出すというよりも、



すでに形成されているネットワーク（福祉資源）を生かしながらか、社会の現状へ働きかけていくことが重要ではないかという見解を述べた。

以上のような報告を受けて、コメンテータの白波瀬氏は、ご自身が関わっている釜ヶ崎のホームレス社会の状況についての話を交えながらか、無縁社会の急激な拡大に対して、社会制度的な対応がついていけておらず、その隙間を埋めるようなかたちで、近年の宗教者の活動の増加があるのではないかと述べた。



さらに、コメンテータやフロアから、社会の側からどのような期待をされていると考えているか、また自身ではどのような役割を担っていると考えているか、活動の中での宗教者としての側面（教義・教団・布教活動等）の関わりを如何、一見「無縁社会」と親近性があるように見える「個人主義」をどう考えるか、今後のネットワーク形成の展望は、などの質問や意見が寄せられ、活発な議論が交わされた。

（文責 編集部）